

# 『天使の相談室』

## ～フィロソフィカル・カウンセリング～

### 【まえがき】

人間は、或る時には、天使の声に生かされている存在である。天使の声とは、神の声でもあり、本来、不二のものである。かのキリスト教においても、神と聖霊とキリストを一体のものとして考えてゆくのが主流である。それ故に、聖霊の声というものは、尊ばなければならないものである。

しかし、この聖霊の声は、非常に身近なものであった。過去もそうであつたし、今もそうであるし、未来もそうであろう。それ故に、「天使の相談室」という名称を付けさせて頂いたのである。

一つ一つの日常生活の指針にいたるまで、幅広く、天使が相談して下さっている所をみると、この天使の愛の深さ、慈悲の深さには、一種の感動を覚える。

常に一つのクラシック音楽のようにして、身近に協奏されている聖霊の御言葉は、限りなく美しいものである。まるで音楽のように、例えば、モーツアルトの音楽を聞くようにして、私はこの天使の御言葉に常に接しているのである。

そして、何か迷うことがあったならば、いつでも指針を頂いてきたのである。それは、隨時、可能なことなのであった。

憶い起せば、我が人生は、聖霊の御言葉と共に歩んできた人生であったと思う。聖霊の御言葉は、人生全体を、深く、高く、広く、やさしく包んで下さるのである。そして、人生の一つ一つを限りなく崇高なものへと昇華して下さるのである。

副題は、フィロソフィカル・カウンセリングというものであるが、この天使は、哲学が御得意のようであり、その内容が哲学ともなりえるものであるので、そのように名付けさせて頂いた次第である。

世界史に遺る偉人の方であられるので、どうか、本書を哲学書として位置づけて頂きたいものである。この聖霊の御名は、何を隠そう、マルクス・アウレリウス・アントニヌスであられる。

さすれば、この一連の記録が、天上界においても、地上界においても、一大聖典となるのは自明のことであり、今後、数千年以上にわたって遺り、愛され、多くの糧を人々の魂に与えつづけることであろうことも自明の理である。

確かに、かの『自省録』の内容と非常によく似ていることであろうと思う。特に、第八章の「反省をあなたに」は、まさしく、『自省録』そのものであろうと思う。

哲学的反省の記録が歴史に遺るという現象は、とても素晴らしいことであろうと思う。それは、その内に、聖霊の御言葉、神の御言葉が数多く散りばめられているからであろう。

このアウレリウスの愛すべき書物が、人類の普遍なるものとなることを、心より祈念する次第である。